伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長　本田　研一

上色見大村より流れ落ちる塩井川が、洗川と合流する地点に、中原年の祢社があります。此処には、古来より大分との交流の証であった竹田往還がはしり、その神社の目前に、昭和四十年代頃まで、宿屋がありました。

そして今でも愛称として、茶屋と呼ばれている家が残っています。

上色見の中心的姓である後藤・佐伯姓等は大分を発しており、昭和三十年代までの経済状況は大分に頼らざるを得ませんでした。私が子供の頃まで行商でお見えになる方は、荻町か竹田からでした。言語学的にも今でこそ熊本の地方弁だと言われる私たちが喋っているこの言葉は、むしろ大分の方が近いと言えます。

この年の祢社境内には、年代不詳の六地蔵があります。顔形とて見分けがつきぬほどに風化しつつも、幾多の風雪に耐え抜いた跡がみうけられます。多分鎌倉時代の作と思われますが、高森町では最も古いと思われる、素朴な形式を残しています。

この年の祢社のもう一つの特徴は、晩秋の頃「願の相撲」と呼ばれる相撲大会があります。収穫を終え冬を迎える時期に、子供の背丈程に盛られた炭が赤々と燃え、その周りを力士が取り囲んでいる風景が思い浮かびます。今でこそその賑わいを失くしたこの祭りは、戦後間もない頃までは相当な賑わいを見せていました。

▲上色見中原年の祢神社

それを知っている人達はもう八十歳を超え、それでも勢いよく往時のありさまを語ってくれます。神社にむかって左手土手は、応援席として早朝より多くの人達が集まってきました。この道を通ると肩と肩がすれ違い。過ぎた日の想いにも似て哀愁を感じました。

力士は阿蘇郡内はもとより、大分・宮崎両県からも参加し、今で言う民宿の形態をとり、農家はその受け入れに邁進しました。

願の相撲が開催される境内周辺には露店が並び、収穫祭的な色合いを濃くし、子供たちは音が出る玩具を吹き鳴らし、遊びました。今でも高森町内から誰々さんの店が来ていたと聞きます。

上色見小学校には、最近までその時に使用した「まわし」が保管されていました。

年の祢社を挟んだ前後の土地は、高台になっており、その双方から、石器そして縄文から弥生式土器片が出土します。小さなカケラ状の土器片に混じって、はっきりした形態の石器が出土しています。たぶんに此処は、この集落の中心地点であったろうと思われます。

私は境内前の畑から、朽ちかけた、指先に乗るほど小さい純金を発見しました。何のために使われたのか、いつの時代の物かはあまりにも小さく判りません。

境内後方の畑には、多くの自然石を集めた、こんもりと盛られた釜戸跡かと思われるものがまだ畑の中に眠っています。早い時期に正式な発掘調査を終えたいと思っています。

古来よりこの地は、人と物の集積地として発展してきました。大村より流れ落ちる水の限界点だと思われるこの地に居を構え、数件の住まいがありました。

大分との交流の方が深かったこの地域の人々にとって、竹田往還と呼ばれる一本の道は、古代より人と物と夢を運びました。どこもがそうであるように、すたれゆくこの風景に活気を取り戻す。もう一度祭囃子のある景色と、そこに集う人々の姿を描きます。